

青年期における自我同一性と対人恐怖的心性

谷 冬 彦¹

EGO IDENTITY AND ANTHROPOPHOBIC TENDENCY IN ADOLESCENCE

Fuyuhiko TANI

This study examined the relationship between ego identity and anthropophobic tendency in adolescence from the point of view of individual-relational self conflict. Individual-relational self conflict means the conflict between individual self and relational self in Japanese socio-cultural environment based on the interdependent view of self in identity crisis. Identity crisis (stage V) with individual-relational self conflict would cause anthropophobic tendency, which would influence the problem of intimacy (stage VI) in identity crisis. And also autonomy (stage II) would influence both identity crisis and anthropophobic tendency. To examine this hypothesis, a covariance structure analysis was carried out. The results showed that all the causal coefficients were significant and the goodness of fit index of this model was high enough. These results suggested that identity crisis with individual-relational self conflict would cause anthropophobic tendency and this relation would be rooted in the sense of autonomy on stage II.

Key words : ego identity, anthropophobic tendency, individual-relational self conflict, adolescence, interdependent view of self.

問 題

対人恐怖症は、日本において特に多い神経症であると指摘されており、日本の文化特性が反映されたものであると考えられている。対人恐怖症は一般的に“他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないかと、他人に不快な感じを与えるのではないかと、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型”と定義され(笠原, 1993), 他者からの評価懸念だけでなく、他者に不快な感じを与えて迷惑をかけることへの懸念に伴う不安という側面があることが、欧米でもみられるシャイネスや社会恐怖との違いであろう。対人恐怖症の発症のほとんどが青

年期であることから、青年期の人格発達の問題との関連が指摘されており、笠原・藤縄・関口・松本(1972)が対人恐怖の病態レベルの第1段階を“平均者の青春期という発達段階において一時的にみられるもの”としているように、青年期における正常な発達過程においても対人恐怖的心性は経験される。小川・林・永井・白石(1979)の比較文化的研究では、アメリカ人青年に比べ、日本人青年は一般に対人恐怖症者に類似した意識、すなわち、対人恐怖的心性を持っていることが示されている。これらのことから、対人恐怖の問題は、日本における文化的特質と青年期における発達の特質の2点と深く関連していると考えられる。

青年期は自己意識を再統合する発達段階であり、Erikson 理論においては自我同一性形成が問題になる。Erikson (1959)によれば、自我同一性の感覚とは、“内的な斉一性と連続性を維持する個人の能力(心理学的意味での個人の自我)が、他者に対して自分が持つ意味の斉

¹ 群馬大学教育学部 (Faculty of Education, Gunma University)

一性と連続性に調和するという自信”(p.94)であり、ここには「個」としての自己と「関係」の中での自己の統合という視点がある。対人恐怖の心性が青年期において自覚されるということは、このような自己統合過程である青年期における自我同一性の危機と何らかの関連があることが推測される。さらに、Erikson の漸成発達理論によれば、第II段階の危機は「自律性 対 恥・疑惑」であり、この問題は第V段階の同一性危機に伴って、「自己確信」に対して、自意識過剰を意味する「同一性意識」として顕在化するとされている。したがって、対人恐怖の心性の発生は、第II段階に由来する自律性の感覚と関わるということが予想される。しかし、Erikson 理論の観点からだけでは、なぜ対人恐怖の心性が日本人青年において多く自覚されるのかを説明することが困難であり、文化的な視点を考慮することが必要になってくる。

これまで多くの研究者が指摘するように、欧米においては、他者から切り離された「個」としての自己の側面が優勢なのに対して、日本においては、他者との「関係」の中での自己の側面が優勢であると考えられている(土居, 1971; 木村, 1972; 河合, 1975; 浜口, 1977; 南, 1983)。近年になって、このような自己と社会・文化との関係を捉える視点は文化心理学という領域において収斂され、Markus & Kitayama(1991)および北山(1995)が、ある文化において歴史的に共有されてきている自己についての暗黙の前提を意味する文化的自己観という概念を提出している。文化的自己観は、「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」からなり、前者は他者から分離・独立し、独自性を主張することが必要とされるような欧米文化において前提とされる自己観であるのに対して、後者は相互協調関係の維持を重視し、他者との関係が自己を定義するような日本をはじめとするアジア文化で前提とされる自己観を意味する。

北山・唐澤(1995)が指摘するように、文化的自己観は、各人が自らの自己意識を能動的に作り上げていく際の暗黙の背景になるため、相互協調的自己観を前提とする日本における個の独立とは、関係性の否定という意味をとることが少なくない。したがって、自我同一性形成に必要な自己の内的斉一性・連続性の獲得・維持のための「個」への志向は、「関係」との対置関係を生み出し、葛藤を生じやすいと考えられる。つまり、相互協調的自己観を前提とする日本の社会文化的環境の中では、青年期の自我同一性危機に際して、相互協調的自己観を内在化させたために優勢になっている「関係」の中での自己の側面と、同一性形成に必要な

自己の内的斉一性・連続性の獲得・維持のための「個」への志向性との間のずれのために「個」と「関係」の対置関係が生じ、それをめぐる葛藤が引き起こされやすいと考えられる。日本人青年の同一性形成におけるこのような葛藤の存在は、鑑(1974)の臨床的考察や森(1989)の比較文化的研究によっても指摘されている。相互協調的自己観を前提とする日本の社会文化的環境の中で、自我同一性危機において生じると考えられる「個」としての自己と「関係」の中での自己との間をめぐるこのような葛藤を「個」—「関係」の葛藤(individual-relational self conflict)という(谷, 1996)。

日本においては相互協調的自己観を前提とするため、同一性危機においては、現実の自分は「関係」の方に向いているが、理想としては「個」を志向しているという形の葛藤が多いだろう。しかしその一方で、現実には「個」の方向に向いていながらも、理想は「関係」の方に向いているという形の葛藤も考えられる。これは相互協調的自己観を前提と考えるならば、現実の自分は実際に「個」の方向に向いているものの、自分が周囲の人々から浮き上がってしまうのではないかという懸念を感じていると捉えることができ、「個」への志向性を現実のものとしながらも相互協調的自己観が理想の側に現れたものであるといえる。それゆえ、どちらの場合も相互協調的自己観を前提として、相互協調的自己観を内在化させたために優勢になっている「関係」の中での自己の側面と、同一性形成に必要な自己の内的斉一性・連続性の獲得・維持のための「個」への志向性との間の統合過程における葛藤であると考えられ、「個」—「関係」の葛藤とは、「関係」の中の自己を基準点としながらも、対置した「個」と「関係」の間をめぐる葛藤であるといえるのである。したがって、「個」—「関係」の葛藤は、「自己を他者から分化して捉えるか、あるいは、他者との関連において捉えるか、という対立的状況における現実の自分の在り方と理想の自分の在り方との間の差異」であると操作的に定義され、「個」—「関係」の対立的状況における現実と理想のずれを1つの指標として測定しうる概念であると考えられる²。

日本における自我同一性危機において「個」—「関係」の葛藤が伴うと考えられる一方で、対人恐怖についても、「個」—「関係」の葛藤と類似した対立矛盾する二面性存在が、臨床的考察によって指摘されている。近藤(1970)は「自己主張的要請」と「配慮的要請」、内沼(1977)は「我執性」と「没我性」、河合(1975)は「個の倫理」と「場の倫理」という言葉で対立する二面性、

すなわち、「個」―「関係」の葛藤が、対人恐怖症の心性の根本であることを指摘している。

これらのことから、日本における自我同一性危機には「個」―「関係」の葛藤が伴い、そのような危機において対人恐怖の心性が生じるのではないかと考えられる。相互協調的自己観を前提とする日本では、「個」としての自己と「関係」の中での自己の統合過程にあるアイデンティティ危機において、「関係」の中での自己を基準点としながらも、同一性形成における内的斉一性・連続性の獲得・維持のための「個」への志向性のために、対置した両者の間を揺れ動くこととなる。それは、対人恐怖症者の心性として我執性と没我性の間を揺れ動くという構造を指摘している内沼(1977)の論をはじめとする臨床的考察にみられるように、対人恐怖の心性を引き起こす構造であると考えられる。

同一性危機における人と関わりあうことに気がつかったり、関わりあいを避けるような対人的緊張については、Erikson(1959)は同一性拡散の臨床像としての親密性の問題(第VI段階)として指摘している。Eriksonによれば、この緊張は、同一性の喪失を引き起こしそのような対人的融合になってしまうのではないかとという緊張であり、他者との「関係」によって「個」としての自己を喪失してしまうのではないかとという懸念を原因とするものであると考えられる。それに対して、相互協調的自己観を有する日本においては、“他人に不快な感じを与えるのではないかと、いやがられるのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする”という「個」としての自己によって他者との「関係」を喪失してしまうのではないかとという懸念を原因とする対人恐怖の心性のために、同一性危機における親密性の問題が現れるのではないかと考えられる。つまり、相互独立的自己観を有する文化では、アイデンティティ危機において、他者からの影響を恐れるという「個」としての自己の防衛のために人との関わりに気がつかったり、避けようとしたりする。それに対して、

相互協調的自己観を有する日本では、アイデンティティ危機において、「個」としての自己による「関係」の中での自己の喪失に対する懸念がより優勢となり、他者に不快な感じを与えるのではないかとという「関係」に対する過剰な配慮が対人恐怖の心性を引き起こし、その結果、対人関係から退こうとするという親密性の問題となって現れると考えられるのである。すなわち、文化的自己観によって基準点とするところが異なり、日本においては「関係」の中での自己を基準点とするために、対人恐怖の心性が同一性の危機における親密性の問題と密接に関わるという様態があると考えられる。

また、Eriksonの漸成発達理論によれば、恥の感覚や自意識過剰は、第II段階の様相に由来する自律性の感覚と深く関わる。鑑(1977)は、欧米においては、外界の力を主体化し自己実現的に働く「自我の能動的自律性」なのに対して、日本では、外界の力に適応的に働く「自我の受動的自律性」であると指摘しており、自我の受動的自律性においては、その危機の反面として、恥の感覚、自意識の拡大が助長され、それが対人恐怖および自我同一性形成に影響を与えている。鑑(1977)の指摘にも示されるように、日本人における自律性は、外界の「関係」を前提として発揮されるものであり、「関係」との対置、つまり、「個」―「関係」の対置が生じ、その中で「個」としての自分を表明するという側面を持つと考えられる。そして、そのような自律性の感覚は、アイデンティティ危機に影響を及ぼすとともに、対人恐怖の心性にも影響を与えると推測される。すなわち、第II段階における自律性の問題は、日本においては「個」―「関係」の対置の中で発揮される側面を持つために、そのような自律性における問題は、アイデンティティ危機において、「個」としての自己をどのように位置づけるのかという問題として顕在化し、その位置づけの不安定さは「個」―「関係」の葛藤を引き起こし、また、対人恐怖の心性とも関わるであろうと考えられるのである。

本研究では、青年期における自我同一性と対人恐怖の心性について「個」―「関係」の葛藤という視点から検討し、その関連構造について共分散構造分析を用いて明らかにすることを目的とする。

仮説は次の通りである。

- (1)日本人青年の同一性危機においては「個」―「関係」の葛藤が伴うであろう。
- (2)対人恐怖の心性と同一性危機における親密性の問題(第VI段階)とは、密接に関わるであろう。

² 葛藤というものは、2つの対立した傾向が同時に存在することを意味するため、葛藤の測定法には、次のようないくつかの観点があると考えられる。

- (1)現実の中で対立するものの誘意性の拮抗に伴う緊張・困惑を捉える方法。
- (2)いずれかを選んだときに起こる欲求不満あるいはその予期を捉える方法。
- (3)現実自己と理想自己の間に差異があれば、そこには緊張があるとして、両自己のずれを捉える方法。

ここでは(3)の立場に立った上で、(2)の立場も考慮し、このような形で「個」―「関係」の葛藤を操作的に定義した。

(3)日本における自律性は、「個」―「関係」の対置の中で発揮されるという側面があるであろう。

(4)「個」―「関係」の葛藤を伴う日本における「アイデンティティ危機」は、親密性の問題とも関わる「対人恐怖の心性」に影響を与えており、また、その両者に対して「個」―「関係」の対置の中で発揮される側面を持つ「自律性」の感覚が影響を及ぼしているであろう。

なお、これまでに「個」としての自己と「関係」の中での自己の概念に類似すると思われる自己の二側面についての研究があるが(山本, 1989; 伊藤, 1993; 高田, 1993; 木内, 1995), それらには両者の葛藤という視点はない。したがって、「個」―「関係」の葛藤という概念を操作的に定義し、測定化する尺度を新たに作成した。

方 法

1. 調査対象

群馬県内の大学生279名(男117名, 女162名)。平均年齢19.9歳(18~22歳)。

2. 測定尺度

(1)自我同一性尺度(Rasmussen, 1964; 宮下, 1987の訳による72項目; 2件法)

Eriksonによる漸成発達理論の最初の6段階, すなわち「基本的信頼 対 不信」から「親密性 対 孤立」までに各々12項目が配置されている。各項目得点と全体尺度の総得点との相関, およびG-P分析(χ^2 検定)によって項目分析を行った。その結果, 5%水準で有意でなかった項目は, 相関では項目1, 10, 14, 37, 57, 61, 68, 70の8項目であり, G-P分析ではその中に含まれる項目1, 10, 14, 57, 61, 70の6項目であった。したがって, 相関において有意水準に達しなかった8項目を除外し, 64項目を採用した。本研究では, この中の第II段階(自律性 対 恥・疑惑)10項目, 第V段階(同一性 対 同一性拡散)12項目, 第VI段階(親密性 対 孤立)9項目のみのデータを使用する。各下位尺度別に, 各項目得点と下位尺度得点との相関を確認したところ, すべて0.1%水準で有意であった。 α 係数は, 第II段階.673, 第V段階.676, 第VI段階.608であった。平均値(標準偏差)は, 第II段階5.5(2.3), 第V段階8.3(2.4), 第VI段階5.4(2.0)であった。

(2)対人恐怖の心性尺度(永井, 1991による42項目; 7段階評定)

I「対人状況における行動・態度の諸特徴」, II「関係的自己意識」, III「内省的自己意識」という3つの次元(各々14項目)から構成されている。各項目得点と全

体尺度の総得点との相関, およびG-P分析(t 検定)によって項目分析を行った。その結果, 両方法ともに, すべての項目において0.1%水準で有意であったので, 42項目をすべて採用した。各下位尺度別に, 各項目得点と下位尺度得点との相関を確認したところ, すべて0.1%水準で有意であった。 α 係数は, 第I次元.958, 第II次元.933, 第III次元.938, 尺度全体で.970であった。平均値(標準偏差)は, 第I次元32.1(17.8), 第II次元34.3(16.3), 第III次元32.9(16.2), 尺度全体99.4(44.3)であった。

(3)「個」―「関係」葛藤尺度

「個」―「関係」の葛藤の定義に従って, 「個」と「関係」が対立する状況(欲求, 感情, 価値観, 能力, 行動など)に関する項目を収集し, 20項目からなる質問紙を作成した(TABLE 1参照)。なお, 作成にあたっては, 川畑(1986)の個・場倫理測定尺度を参考にした。「全くあてはまらない」から「全くその通りである」までの7段階評定(1~7点)で, まず現実水準(現在の自分にあてはまると思うもの; R)を評定させる。「個」への方向を高い得点として得点化するため, R得点は「個」―「関係」の対置の中で現実的に「個」の方向に向かっている程度を示す指標となる。その上で, 理想水準(本当はそうありたいと思うもの; I)を評定させ, 現実水準と理想水準の差(D)をもって, 「個」―「関係」の葛藤であると操作的に定義する。「個」および「関係」のどちらの方向へのずれも, 「個」―「関係」の葛藤であると考えられるので, 差は絶対値として算出した。

各項目得点と総得点との相関, およびG-P分析(t 検定)によって項目分析を行った。その結果, 両方法ともに, すべての項目のR・I・Dにおいて0.1%水準で有意であったので, 20項目をすべて採用した。主成分分析を行ったところ, 第1主成分の負荷量が, Rで.427~.731, Iで.369~.620, Dで.424~.680であった。第3主成分までの固有値が順に, Rで7.101, 1.918, 1.375, Iで5.679, 1.828, 1.563, Dで6.911, 1.526, 1.104であり, 第1主成分から第2主成分の間で固有値の落ち込みが大きくみられ, 第1主成分の寄与率がRで35.5%, Iで28.4%, Dで34.6%と高いことから, 一次元的な構造を持っていることが確認された。

α 係数は, Rで.901, Iで.865, Dで.898であった。139名(男44名, 女95名)について約1か月の間隔において, 再検査法による信頼性係数を算出したところ, Rで.841, Iで.778, Dで.785であった。以上のことから, 「個」―「関係」葛藤尺度は, 内的整合性の観点か

TABLE 1 「個」—「関係」葛藤尺度項目

項 目
a) 1. 自分の欲求を抑えても、人間関係の維持に努める。
2. 周囲の人々との調和が乱れても、自分のやりたいことをする。
a) 3. 自分の感情を抑えても、その場の雰囲気を乱さない。
4. たとえその場の調和が乱れても、自分の気持ちを表す。
a) 5. 自分を変える努力をしてでも、周囲の人々とうまくやっていこうとする。
6. 周囲の人々の価値観と違っていても、自分自身の価値観を疑わない。
a) 7. たとえ自分の能力を発揮できなくても、集団の調和に努める。
8. 周囲の人々から浮き上がっても、自分の能力を発揮しようとする。
9. 周囲の人々に合わせるよりも、自分自身の考えをつらぬいて行動する。
a) 10. 個性的であるよりも、他の人とあまり差がないようにしている。
11. 人間関係が乱れても、他の人よりも優越しようとする。
a) 12. 自分自身の考え方よりも、周囲の人々の意見を尊重する。
13. 周囲の人々と意見が違ってても、自分自身の信念が動揺することはない。
a) 14. 自分自身の意見を強く主張するよりも、他の人達に合わせて発言する。
a) 15. 自分自身の考え方を变えても、周囲の人々から嫌われないようにする。
16. 周囲の人々から反感をかってても、自分が正しいと思うことは正しいと主張する。
a) 17. 自分がしたいように行動するよりも、周囲の人々から好まれるように行動する。
18. 周囲の人々のペースと違ってても、自分のペースは守る。
19. 周囲の人々から批判されても、自分自身の判断を信頼する。
a) 20. 自分自身の意向よりも、周囲の人々が自分に何を期待しているかによって行動が左右される。
a): 反転項目

らも、安定性の観点からも、高い信頼性を持つことが確認された。平均値(標準偏差)は、Rで75.4(15.8)、Iで89.1(14.7)、Dで25.0(14.2)であった。

3. 手 続

上記の3種の尺度を、講義時間に配布し、集団的に実施した。一部の者については、後日提出する形にした。回答所要時間は15~20分であった。調査時期は、1993年7月~11月であった。

結 果

1. 各尺度得点の相関

自我同一性尺度と対人恐怖的心性尺度の相関をTABLE 2に示す。自我同一性と対人恐怖的心性の間には、いずれも有意な負の相関がみられ、自我同一性と対人恐怖的心性は深い関わりを持つことが示唆される。対人恐怖総得点との相関において、同一性第VI段階得点との相関係数が最も高いことに示されるように、対人恐怖的心性と親密性の問題の間には特に深い関わりがあることが示唆されており、これは仮説(2)を支持するものである。

また、「個」—「関係」葛藤尺度と自我同一性尺度・対人恐怖的心性尺度の相関をTABLE 3に示す。「個」—「関係」葛藤尺度のI得点においては、ほとんど有意な相関はみられないが、D得点においては各同一性得点との間に有意な負の相関、対人恐怖得点との間には有意な正の相関がみられ、R得点においては各同一性得点との間に有意な正の相関、対人恐怖得点との間には有意な負の相関がみられる。したがって、「個」—「関係」の葛藤(D得点)が大きいほど、同一性の程度が低いとともに対人恐怖の程度が高く、さらに、現実水準が「個」への方向に向いている(R得点)ほど、同一性

TABLE 2 自我同一性尺度と対人恐怖的心性尺度の相関

	対人恐怖 第I次元	対人恐怖 第II次元	対人恐怖 第III次元	対人恐怖 総得点
同一性第II段階	-.363***	-.551***	-.563***	-.555***
同一性第V段階	-.378***	-.429***	-.535***	-.506***
同一性第VI段階	-.634***	-.539***	-.496***	-.634***

***p<.001

TABLE 3 「個」—「関係」葛藤尺度と自我同一性・対人恐怖的心性尺度の相関

	個-関係 R得点	個-関係 I得点	個-関係 D得点
同一性第II段階	.440***	.149*	-.246***
同一性第V段階	.192**	-.083	-.311***
同一性第VI段階	.307***	.025	-.242***
対人恐怖第I次元	-.143*	.011	.208***
対人恐怖第II次元	-.330***	-.105	.270***
対人恐怖第III次元	-.253***	-.041	.270***
対人恐怖総得点	-.271***	-.049	.281***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

の程度が高いとともに対人恐怖の程度が低いという傾向があるといえよう。しかし、同一性得点との相関をみると、D得点においては第V段階得点との相関が最も高くなっており、R得点においては、第II段階得点との相関が最も高くなっている。これらの結果は、「個」―「関係」の葛藤(D得点)は、第V段階における同一性の危機と特に関わるものであり、現実水準が「関係」との対置において「個」へ向かう傾向(R得点)は、第II段階の問題を根底とした自律性の感覚と特に関わるということを示すと考えられる。すなわちこのことは、日本人青年の同一性危機においては「個」―「関係」の葛藤が伴うという仮説(1)を支持するものであるとともに、日本における自律性は「個」―「関係」の対置の中で発揮される側面を持つという仮説(3)を支持するものである。

2. 共分散構造分析によるモデルの検討

仮説(4)に従って、モデル作成を試みた。同一性尺度の第V段階得点と「個」―「関係」葛藤尺度のD得点(「個」―「関係」の葛藤)とは、日本における青年期の同一性危機に関わる変数であると考えられるので、これらに関わる潜在変数を「アイデンティティ危機」という構成概念とした。また、「個」―「関係」葛藤尺度のR得点(「関係」との対置において「個」へ向かっている程度)は、同一性尺度の第II段階得点とともに、日本における自律性に関わる変数であると考えられるので、これらに関わる潜在変数を「自律性」という構成概念とした。さらに、同一性尺度の第VI段階得点は、同一性危機に伴う親密性の問題であり、対人恐怖の心性を反映すると考えられるので、対人恐怖の心性尺度の第I、II、III次元得点とともに、「対人恐怖の心性」という潜在変数に関わるものであるとした。そして、「自律性」

は、「アイデンティティ危機」に影響を与えるとともに、「対人恐怖の心性」に影響を与え、また「アイデンティティ危機」は、「対人恐怖の心性」に影響を与えると考えられる。したがって、このモデルを検証するために共分散構造分析を行った(豊田, 1992)。結果はFIGURE 1に示す。測定方程式および構造方程式における因果係数は、いずれも有意であった。GFIの値は、.917であり、AGFIの値は、.824であった。したがって、モデル全体の適合性は十分であり、このモデルの説明力は高いといえよう。また、内生的潜在変数の決定係数(R^2)は、「アイデンティティ危機」で.433、「対人恐怖の心性」で.648と十分に高い値であり、構成したモデルの因果関係の規定力は高いといえよう。

考 察

本研究では、「個」―「関係」の葛藤を伴う日本における「アイデンティティ危機」は、親密性の問題とも関わる「対人恐怖の心性」に影響を与えており、また、その両者に対して「個」―「関係」の対置の中で発揮される側面を持つ「自律性」の感覚が影響を及ぼしているということを共分散構造分析を用いて検討した。その結果、測定方程式においても構造方程式においても因果係数がすべて有意であったことから、それらの関係性は、すべて支持されたといえる。また、モデル全体の適合性も十分な値を示し、構成されたモデルは全体として説明力が高いものであったといえよう。さらに、内生的潜在変数の決定係数も高く、因果関係の規定力も高いモデルであった。

1. アイデンティティ危機と対人恐怖の心性

「個」―「関係」の葛藤を伴うアイデンティティの危機が、対人恐怖の心性に影響を与えているということ

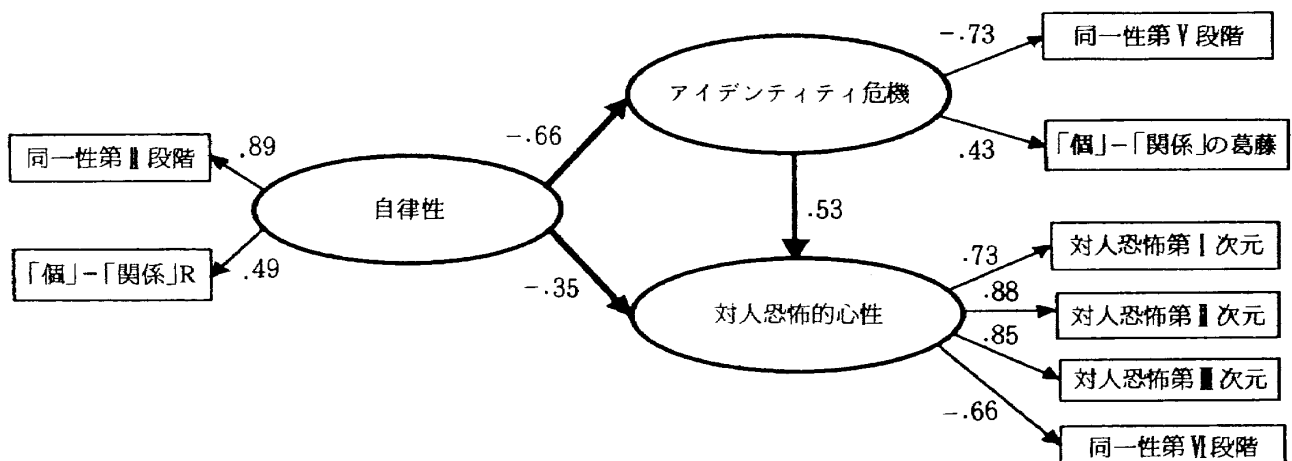


FIGURE 1 共分散構造分析によるモデル (誤差項は省略)

は、他者との関係を重視する相互協調的自己観を前提とする日本の社会文化的環境の中で、「個」としての自己と「関係」の中での自己が統合できていないと、「関係」に対する過剰な意識をもたらし、その結果として対人恐怖的心性が発生するということを意味すると考えられる。

本研究においては、親密性の問題が対人恐怖的心性と密接に関わるということが示唆されたが、このことは、対人的融合になってしまうのではないかと、「個」としての自己の喪失についての懸念が、人との関わりあいに気をつかうような親密性の問題として現れるという Erikson (1959) の指摘と対照的である。つまり同じようにアイデンティティ危機において人との関わりに気をつかったり、避けようとしたりするといっても、相互独立的自己観を有する文化においては、他者からの影響を恐れるという「個」としての自己の防衛のためであると考えられる。それに対して、相互協調的自己観を有する日本では、「関係」の中での自己の喪失に対する懸念がより優勢となるため、他者に不快な感じを与えるのではないかと「関係」に対する過剰な配慮が対人恐怖的心性を引き起こし、その結果、対人関係からできるだけ身を退こうとすると考えられるのである。

どちらの場合も、「個」としての自己と「関係」の中での自己の統合によって自我同一性は形成されるが、文化的自己観の違いによって、その葛藤の在り方と統合過程の様相は異なるのではないかと推測される。つまり、文化的自己観によって、基準点とするところが異なるため、同一性形成における葛藤の様相も異なり、相互協調的自己観を前提とする日本においては、「関係」の中での自己を基準点とするため、「個」―「関係」という対置関係の中での葛藤がアイデンティティ危機には伴い、そのような危機において対人恐怖的心性が生じると考えられる。対人恐怖的心性は、相互協調的自己観を前提とする社会文化的環境の中での「個」―「関係」の葛藤に伴うアイデンティティ危機において特徴的に自覚されるものであると考えられる。

2. 自律性の問題

本研究の結果から、「自律性」は「アイデンティティ危機」に影響を与えるとともに、「対人恐怖的心性」に影響を与えていた。このことは、自律性の問題が、アイデンティティ危機を介して対人恐怖的心性に影響を与えるという間接効果と、自律性の問題が直接対人恐怖的心性に影響を与えるという直接効果の2つが存在するということを示唆するものである。因果係数に着

目すると、「自律性」から「対人恐怖的心性」への因果係数 (-.35) よりも、「アイデンティティ危機」への因果係数 (-.66) や「アイデンティティ危機」から「対人恐怖的心性」への因果係数 (.53) の方が高い。また、「自律性」が「対人恐怖的心性」に与える直接効果 (-.35) と間接効果 (-.35) はほぼ等しかった。これらのことは、単に「自律性」の問題だけでなく、「アイデンティティ危機」を考慮することによってこそ「対人恐怖的心性」は十分に説明しうるということを示唆するものである。

また、この間接効果と直接効果の2つは、Erikson の漸成発達理論に基づくならば、第II段階の問題が、第V段階における同一性の危機に伴って顕在化した「自己確信 対 同一性意識」と、第II段階の様相に由来する「自律性 対 恥・疑惑」という感覚の2つを対応させることができるかもしれない。日本人青年においてこのような第II段階を根底とする力動的関係が際だつのは、鑑 (1977) が指摘しているように、自律性の在り方が欧米と日本では異なるということが1つの原因として考えられるであろう。本研究では、日本における自律性は「個」―「関係」の対置の中で発揮されるという側面を持つものであることが示された。つまり、相互協調的自己観を有する日本においては外界の「関係」が前提となるため、「個」―「関係」の対置関係が生じ、その中で自律性は発揮されると考えられる。そのような自律性は、鑑 (1977) が指摘するように、その反面として恥の感覚・自意識の拡大を助長し、青年期におけるアイデンティティ形成や対人恐怖的心性に影響を及ぼすと考えられる。すなわちこのことは、日本における相互協調的自己観が構成する社会的現実が、第II段階の危機の様相を根底として、自我の漸成発達に影響を与え、日本におけるアイデンティティ危機の特質を形成するとともに、青年期において対人恐怖的心性を生じやすいという特徴を形成すると考えられるであろう (谷, 1996)。

3. モデル全体について

Erikson の漸成発達理論によれば、第II段階・第V段階・第VI段階の相互関連性は予想されるものである。本研究におけるモデルは、そのような漸成発達理論に、「個」―「関係」の対置で発揮される自律性・「個」―「関係」の葛藤・対人恐怖的心性という日本における文化的特質と考えられる相互関連性を重ね合わせたものと考えることができる。すなわち、本研究は、Erikson の漸成発達理論と日本の文化的特質を統合させたモデルを構成し、その適合性の高さを示したものであると捉

えることもできるのである。したがって、Erikson の漸成発達理論の根本は文化を超えた普遍的側面をもちながらも、文化によってその様相には差異がみられるという谷 (1996) の論を実証的に裏付けたものといえよう。

4. 今後の課題

本研究では、自我同一性を測定するものとして Rasmussen の自我同一性尺度を使用したのが、内的整合性や内容的妥当性になお検討の余地があるように思われる。したがって、内的整合性や内容的妥当性を高めた自我同一性尺度の作成が今後必要であろう。また、自我同一性の発達とともに、「個」―「関係」の葛藤や対人恐怖の心性の程度は低くなるという発達の变化が予想される。したがって、そのような発達の变化について検討することも今後の課題であろう。

引用文献

- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York : W.W. Norton & Company. Re-issue, 1980 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房
- 浜口恵俊 1977 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, 115—122.
- 笠原 嘉 1993 対人恐怖 加藤正明ら (編) 新版精神医学事典 弘文堂 Pp. 515.
- 笠原 嘉・藤縄 昭・関口英雄・松本雅彦 1972 正視恐怖・体臭恐怖―主として精神分裂病との境界例について― 医学書院
- 川畑直人 1986 日本人キリスト者青年とアイデンティティ―母性社会における父性的宗教― 日本教育心理学会第 28 回総会発表論文集, 338—339.
- 河合隼雄 1975 自我・羞恥・恐怖―対人恐怖症の世界から― 思想, 611, 670—685.
- 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 北山 忍 1995 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153—167.
- 北山 忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133—163.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100—106.
- 近藤章久 1970 対人恐怖について―森田を起点として― 精神医学, 12, 382—388.
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224—253.
- 南 博 1983 日本の自我 岩波書店
- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253—258.
- 森 裕子 1989 文化に固有な自我同一性概念と自我同一性葛藤 日米比較研究 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 167.
- 永井 徹 1991 対人恐怖の心性の構造について―対人恐怖の心性の質問紙の作成― 聖セシリア女子短期大学紀要, 16, 50—55.
- 小川捷之・林 洋一・永井 徹・白石秀人 1979 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(1)比較文化的視点から 横浜国立大学教育学部紀要, 19, 205—220.
- Rasmussen, J.E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815—825.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較―日本人大学生にみられる特徴― 教育心理学研究, 41, 339—348.
- 谷 冬彦 1996 アイデンティティの文化的差異に関する一考察―日本文化とアイデンティティ― 現代社会文化研究 (新潟大学大学院現代社会文化研究科), 4, 181—206.
- 鐘幹八郎 1974 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要, 23, 329—342.
- 鐘幹八郎 1977 自我同一性の根としての自律性に関する一考察―能動的自律性と受動的自律性について― 広島大学教育学部紀要, 27, 137—148.
- 豊田秀樹 1992 SAS による共分散構造分析 東京大学出版会
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学 弘文堂
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究―青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討― 教育心理学研究, 37, 120—127.

付 記

本論文は、群馬大学教育学研究科に提出した修士論文 (1993 年度)、及び日本教育心理学会第 36 回大会で発

表した研究のデータを再分析し、新たに執筆したものである。

修士論文作成にあたってご指導いただきました東京女子大学 古澤頼雄教授に深く感謝致します。また、本論文作成にあたってご指導いただきました群馬大学

古屋健助教授に深く感謝致します。

貴重なご教示をいただきました新潟大学 石郷岡泰教授，奈良大学 高田利武教授，群馬大学 藤崎真知代教授に御礼申し上げます。

(1996.8.22 受稿, '97.4.18 受理)